

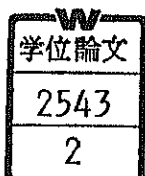
博士(人間科学) 学位論文 概要書

都市化時代のエジプト

1998年1月

早稲田大学大学院人間科学研究科

店田 廣文



本研究は、都市化や人口移動の激化にともなう全体社会の流動化がもたらす都市社会変動を、現代エジプト社会を対象として明らかにしようとする。とりわけ、その対象を大都市カイロに据えて、流動化による都市社会の変動について論じることを目的としている。まず本研究の位置づけを地域研究と都市社会学研究の2つの立場から明らかにする。

地域研究の分野からみた意義は、3つにまとめられる。第1に、エジプト都市社会に関する流動性や移動性の分析を軸にした一貫した研究であること、第2に、エジプト地域研究さらには中東イスラーム地域研究の分野でほとんど無視されてきた都市社会集団とりわけ同郷者団体について研究を展開していること、第3に、今なお発展途上にある地域研究の分野において、社会学の方法論を用いたマクロな全体社会分析とミクロな地域社会分析の統合を試みた地域研究であること、である。

つぎに都市社会学分野からみた意義は、ルイス・ワース以来の都市化論（アーバニズム論）の理論系譜に関連するものである。都市化論はワース以降3つの方向に展開したとされる。第1はワースの立論にそった社会的解体論、第2にはそれへの批判としての構造論あるいは構成論、さらに第3としてワースの理論図式の基本的考えを継承し発展したフィッシャーによるアーバニズムの下位文化理論である。これら理論図式を枠組みとして、エジプトの都市化・流動化がもたらした都市社会変動を評価し、都市化論の再検討という課題を提示している。つまり本研究は、特殊性をおびた地域研究にとどまらず、普遍性を志向する社会学的研究としての意義を持つものとなっている。

本書の構成は以下のようなものである。序では、本研究の目的と位置づけ、構成、が述べられる。第1部の第1章では、現代エジプト都市社会の形成と現状を把握するために、人口移動が都市社会に与える影響を、マクロな全体社会レベルとミクロな地域社会レベル双方の視点から分析する。エジプトにおける人口移動の研究成果を参照し、先行研究の仮説群を移動要因、移動類型、適応の3つの枠組に則って整理し、それらを1976年の人口センサス・データに基づいて吟味検討している。そして活発な国内人口移動、移動パタンの変化、移動者属性の変化などを指摘し、それらが都市社会に与える影響を指摘する。第2章では、移動人口の属性や移動プロセス、定着プロセスの詳細な分析が行われる。農村ー都市人口移動プロセスの実態を調査事例をもとに導き出し、それに対応する移動者の都市と農村の両地域との関係のあり方を分析して、エジプトの都市化の特質をミクロな観点から考察する。エジプトの都市化を支えているのが、都市と農村を結びつけている農村的・親族的紐帯や親族集団、同郷者団体であることが明らかにされる。また今後の研究課題としての第1次集団研究の重要性が指摘される。第3章では、1970年代から1980年代にかけて大きく変動したエジプト社会を、人口移動の構造を分析することで捉える。社会変動を写し出す鏡としての人口移動の構造変動を、1976年と1986年の人口センサス・データの分析から提示する。都市化率は、この10年間は横道いであったが、直前移動量の倍増、地方内移動や県内移動、農村間移動などの大幅な増加というパタンの変化など国内人口移動構造の大きな変化が指摘される。エジプト社会の新たな流動化昂進の現状が示される。

第2部の第4章では、首都「カイロ圏」の都市構造が分析される。首都カイロを擁する3県を対象として、「カイロ圏」の社会地図、社会地区分析、農村部をも含めた地区分類が、多変量解析によって捉えら

れ、1986年時点における都市構造の概況が示される。「カイロ圏」は、人口移動構造の変動に伴い、その人口増加速度は減じつつあるが、多様な社会地区を擁しつつ膨張していることが明らかにされる。第5章では、都市研究の主たる対象であったカイロやアレクサンドリアなどの大都市ではなく、研究が手薄であった地方都市に焦点をあてて、その発展と現状を人口分析によって捉える。地方都市発展の諸条件とエジプト地方都市の分析データについて論じ、地方都市の発展と現状を1976年の人口センサス・データを中心にして記述している。多数の地方都市が発展しつつあること、今後も地方都市に注目する必要性が述べられる。

第3部の第6章では、エジプトの都市に存在する多種多様な社会集団のうち、第一次集団について論じられる。都市社会集団の概況を述べたあと、第一次集団である同郷者団体に着目した分析が従来の研究仮説を検討しつつ、都市化の文脈の中で行われる。大都市カイロにおける同郷者団体の都市－農村志向性についての研究課題が提示される。第7章では、前章を受けて、その後の同郷者団体の組織や活動の統計的データの提示と、7つの同郷者団体のヒアリング調査結果を使用して、大都市カイロにおける同郷者団体の都市－農村志向性についてふたたび論じられる。そこでは、墓地の建設・維持管理活動の事例分析から、移動者が都市志向原理と農村志向原理を使い分けながら、都市生活を営んでいることが明らかにされる。

さて終章では、先行する各章の論点をふまえて、都市社会における流動化と社会変動に接近する。農村社会の変動の現状についても素描したうえで、都市的社会関係と都市的生活様式に焦点をしぼって「エジプト的アーバニズム」の将来像が考察される。近年の流動構造の変動の中で、外部社会との関係では「定着的」で内部的には「流動的」なカイロ市住民の都市的社会関係のありよう、およびカイロにおける都市的生活様式を支える共同性の形成原理が問い直される。

結では、将来の研究課題が述べられる。地域研究の観点からすると、同郷者団体をふくむ都市社会集団を対象とした生活の質向上をめざす社会開発にかかわる調査研究である。都市化研究については、マクロレベルの都市社会分析をベースとしつつ、ミクロレベルの同郷者団体研究に取り組むことにより、都市化論の再検討を行なうことが課題である。

このように地域研究および都市化研究の2つの研究課題の交差するところに位置するカイロの同郷者団体の調査研究を主軸にして、エジプトの都市化・都市社会研究を継続していくことが今後の課題である。